# 19–20 世紀転換期ウィーンの スポーツ界における 反ユダヤ主義とシオニズム

## ――S.C. ハコア・ウィーンの歴史 (1) ――

古　田　善　文

### はじめに

本稿は、「スポーツと政治」の関係を、1909 年にウィーンで創設されたユダヤ・スポーツ競技団体、S.C. ハコア・ウィーン（Sport Club Hakoah Wien: 以下ハコア）の歴史を通じて明らかにする一連の試みの端緒として位置付けられる[1)]。

ハコア（Hakoah）とは、ヘブライ語で「力」を意味する言葉である。クラブ名にヘブライ語が使用されていることからも明らかなように、ハコアの特徴のひとつは指導部やメンバーの中にユダヤ民族主義者やシオニストが多く含まれていたことである。言うまでもなく、シオニストとはウィーン社会への同化を否定し、テオドール・ヘルツル（Theodor Herzl）が説いた「ユダヤ国家（Judenstaat）」建設を支持するユダヤのことである[2)]。この点においてハコアは、ウィーンのユダヤ社会内で圧倒的多数派の「同化ユダヤ（assimilierte Juden）」が参加する他のスポーツ競技団体とは、建前上、その性格や存在意義が根本的に異なっていたのである[3)]。

ハコアのもうひとつの特徴は、後述する専門的な体操競技（Turnen）団体とは異なり、当時としては珍しく多くの競技部門を有するオールラウンド型の

スポーツ競技団体（Allrounder-Sportklub）だったことである[4)]。成立当初の1909年にはサッカー部門しか存在しなかったが、その後1914年までの間にフェンシング、陸上、ホッケー、レスリング、水泳部門が新たに作られ、メンバー数も誕生から数年のうちに1,500人を数えるまでに増加した[5)]。

数あるハコアの競技部門でも特に人々の関心を集めたのがサッカー部門であった。1924/25年シーズンは、ウィーン・リーグで初めてプロのサッカー選手が認められた重要な年であるが、この年、この誕生間もないウィーンのプロ・サッカーリーグにおいて、ハコアは他の古参・名門チームを抑えて優勝の栄誉に輝き、オーストリアのサッカー史に燦然と輝く1ページを書き加えたのである。その活躍と人気ぶりはオーストリア国外にも広く喧伝され、初優勝の年に続く1926年と1927年の夏期シーズンオフに、ハコアはアメリカ合衆国へ2度にわたって遠征に赴き、ニューヨークをはじめとする当地のサッカーファンやユダヤ市民をおおいに熱狂させた。

こうしたハコアの華やかな歴史は、1938年3月のナチ・ドイツによる独墺合邦（Anschluss）により突然その幕を閉じることとなった。活動停止となったクラブメンバーの多くは近隣諸国への亡命を余儀なくされた。また合邦後、少なくともハコアのメンバー37名がナチあるいはその命令によって命を落としている[6)]。

本稿の表題が示すとおり、考察の対象となる主要な時期は19世紀末であり、本稿が扱うのはハコアの活動そのものではない。むしろ、ハコア誕生と関係の深いその前史の研究が本稿の主題となる。

日本ではほとんどその存在が知られていないハコア研究の出発点となるべきこの小稿が、第1の論点として設定するのは、19世紀末のヨーロッパの大都市を席巻した反ユダヤ主義が、スポーツ界とくにユダヤ体操競技者にどのような負の影響をもたらしたかを検証することである。具体的には、ウィーンの事例に沿いながら、中心的な役割を果たした人物として、ウィーンの「第1ウィーン体操協会（Der Erste Wiener Turnverein）」の幹部であった反ユダヤ主義者フランツ＝クサーヴァ・キースリング（Franz Xaver Kießling）を取り

上げ、彼の主張と行動が体操競技界ひいてはオーストリア社会に与えた重大な影響を検証する。

第 2 の論点は、1894 年にフランス社会を二分し、欧州各地の「同化ユダヤ」社会を震撼させた「ドレフュス事件」[7] に触発され、反ユダヤ主義への対抗手段のひとつとして新たに誕生したユダヤ民族主義やシオニズムが、ユダヤのスポーツ競技者に与えた思想的影響を検証することである。ここでは特に 1898 年バーゼルで開催された第 2 回シオニスト会議（Zionistenkongress）において、シオニズム的理念に基づくスポーツ（とくに体操競技）の重要性を説いた当代の著名な作家・文芸評論家マックス・ノルダウ（Max Nordau）の演説と、それに対する反響に焦点があてられることになる。ここで述べられたノルダウの有名なテーゼ、「逞しきユダヤ（Muskeljudentum：直訳すれば筋肉隆々のユダヤ）」思想は、後のハコアの「綱領」のなかでも主要な位置を占めることからも、その意味や由来を検証することはハコア研究にとって重要な論点となろう。

第 3 は、反ユダヤ主義とシオニズムが錯綜する 19 世紀末から 20 世紀初頭に、ノルダウの思想がヨーロッパの地においてどのように実践されていったかを確認することである。この点について、本稿は、ユダヤ学生たちを中心にベルリンやウィーンで続々誕生したユダヤ体操競技団体 —— 例えば、1899 年にウィーンで成立した「ユダヤ学生体操競技団体（Jüdischer Akademischer Turnverein）」—— を具体的事例として、その成立状況や初期の活動内容を多面的に紹介していく。そして最後に、こうしたユダヤ側の動きの延長線上に位置付けられるウィーンのハコアの成立に触れる。

1）戦後におけるハコア研究の本格的出発は、1938 年の独墺合邦から 50 年を目前にした 1987 年に刊行された次の著作に始まる。John Bunzl（Hrsg.）, *Hoppauf Hakoah. Jüdischer Sport in Österreich, Von den Anfängen bis in die Gegenwart*, Wien 1987　これを機に大学の Diplomarbeit などの研究対象にもハコアが取り上げられるなったようになった。例えば以下を参照。Ulrike Maria Gschwandtner, *Jüdischer Sport in einer antisemitischen Umwelt. Kontinuitäten antisemitischer Verhaltensmuster im österreichischen Sport des 20. Jahrhunderts, exemplarisch behandelt am Beispiel des jüdischen Sportklubs „Hakoah“*,（Diplomarbeit）, Salzburg 1989　1995 年には「ウィーン市ユダヤ博物館（Das

Jüdische Museum der Stadt Wien)」(1988 年創設)も「ハコア展」を開催し、有益な展覧会カタログを編纂している。Jüdisches Museum der Stadt Wien (Hrsg.), *HAKOAH. Ein jüdischer Sportverein in Wien 1909–1995. Zur Ausstellung „HOPPAUF HAKOAH". EIN JÜDISCHER SPORTVEREIN IN WIEN 1909–1995 im Jüdischen Museum in Wien, 5. Mai bis 30. Juli 1995*, Wien 1995　さらに、ハコアの誕生から 100 年となる 2009 年頃にはハコア研究の集大成となる以下の著作が公刊されている。Susanne Helene Betz / Monika Löscher / Pia Schölnberger (Hrsg.), *„... mehr als ein Sportverein". 100 Jahre Hakoah Wien 1909–2009*, Innsbruck/Wien/Bozen 2009；Simon Schwaiger, *Sportklub Hakoah Wien. Ikone jüdischen Selbstbewusstseins*, Saarbrücken 2009 その他、オーストリアのユダヤ・サッカーの発展史について論じた成果に以下がある。Michael Lechner, *„Wie vom anderen Stern" – Jüdischer Fußball in Wien (1909–1938). Eine Kultur- und Sportgeschichte*, Saarbrücken 2010 またハコアを含め欧州のユダヤとサッカーの関係を広く扱った研究書に以下がある。Dietrich Schulze-Marmeling (Hrsg.), *Davidstern und Lederball. Die Geschichte der Juden im deutschen und internationalen Fußball*, Göttingen 2003

2) ブダペスト生まれのヘルツル(1860–1904 年)が記したシオニズムのバイブルともいうべき『ユダヤ人国家』の中ではユダヤ国家建設の地はパレスチナに決定されていた訳ではなく、ユダヤ民族の世論によってパレスチナかアルゼンチンかのいずれかになる、という記述になっている。テオドール・ヘルツル(佐藤康彦訳)『ユダヤ人国家 ── ユダヤ人問題の現代的解決の試み』法政大学出版局 2011 年、新装版第 1 刷、33 頁。ヘルツルの経歴等については、佐藤康彦「訳者あとがき ── ヘルツルと『ユダヤ人国家』──」、前掲書、186–198 頁、ウォルター・ラカー(高坂誠訳)『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』第三書館 1987 年、124–200 頁を参照。

3) 例えば、1892 年にレンベルクで創設された「ユダヤ民族主義党」はユダヤ民族主義者やシオニストを結集する政党だったが、1919 年 2 月 16 日に実施されたオーストリア第 1 共和国憲法制定国民議会選挙(普通平等選挙)において、同党は地盤とするウィーンでも僅かに 7,760 票を獲得したにとどまった(ウィーンのユダヤ人口に関する第 1 章の注 10)も併せて参照されたい)。Dieter J. Hecht, Die Jüdischnationale Partei, in: *Chilufim. Zeitschrift für Jüdische Kulturgeschichte*, 7/2009, S.125　当時のウィーンのユダヤ社会で多数派を形成していた「同化ユダヤ」は自らのユダヤ的出自やユダヤの伝統を隠す傾向にあった。こうした「同化ユダヤ」の意識は、ユダヤ選手が他のスポーツクラブからハコアに移籍することを妨げる方向にも作用した。つまりハコア移籍によって選手が、自らがユダヤであることを他人に知られるばかりか、シオニストと思われることを恐れたからである。Schwaiger, *a.a.O.*, S. 16

4) 最初のオールラウンド型のユダヤ・スポーツ競技団体はウィーンのハコアであったが、類似の団体が相次いで誕生した。それらは Achduth、Hapoel、Hasmonea、Jüdischer Athletik Club、Kadima などである。また、ハコアの登場と活躍を契機にして、ユダヤの体操競技団体も他の競技部門を増加させることになった。第 1 次世界大戦後も、多くのユダヤ選手が Wiener-Amateur-Sportverband(1926 年以降 Austria と改称)や die Vienna、WAC などの非ユダヤ系のスポーツクラブに属し活動を展開していた。Bunzl, *a.a.O.*, S. 24

5) Ebenda ウィーンのハコアは他の都市のユダヤ人コミュニティーにも有効なモデルとなった。1919 年にはシュタイアーマルク州の州都グラーツにもオールラウンド

型のハコアが創設され、すぐに 400 人の団員を集めるまでに発展した。レオーベンにも 1926 年にハコアが成立した。同じく上オーストリア州の州都リンツやティロールの州都インスブルックにも相次いでハコアが誕生したが、団員の数は都市の規模に応じてウィーンのそれには大きく及ばなかった。Schwaiger, *a.a.O.*, S. 15

6）Jüdisches Museum der Stadt Wien (Hrsg.), *a.a.O.*, S. 82f. 第 2 次世界大戦後再建された現在のハコアは、前身の組織に比べると政治色を排除し、「ユダヤの若者を肉体的には健全でスポーツ的には鉄のように強い人間をつくりあげること」を課題にして設立された。„Unsere Aufgaben“: in: *Nachrichtenblatt des Sportklub*$_{(sic)}$ *Hakoah*, Nr.10, 2.Jahrgang, September 1947 現在のハコアが抱える競技部門はバスケットボール、ボーリング、柔道、陸上、空手、水泳、旅行およびスキークラブ、テニス、卓球、ハイキング（Wandern）である。さしあたり現在のハコア・ウィーンの情報については以下の URL を参照されたい。http://www.hakoah.at/de/（2016 年 12 月 30 日閲覧）

7）1894 年にフランスの根深い反ユダヤ主義を背景にして起きた冤罪事件である。ドイツのスパイとして逮捕されたユダヤのドレフュス大尉は南米ギアナへ流刑となるが、文豪ゾラや歴史家モノーの救援活動で 1899 年に再審、1906 年には無罪を勝ち取り、彼の名誉も回復された。この事件を通じて、フランスにおける世論はドレフュス糾弾派と擁護派に二分され、同国の政治・社会も危機に陥った。以上の記述は、西川正雄他編『角川世界史辞典』角川書店 2001 年、676 頁を参考にした。なお、「ドレフュス事件」に関する古典的名著としては以下がある。大佛次郎『ドレフュス事件』朝日新聞社 1974 年。

## 1. 19 世紀オーストリアの体操競技団体における反ユダヤ主義

### ⑴ 「ドイツ体操協会」

ドイツ、オーストリアにおける体操競技の歴史は、19 世紀初頭のナポレオン戦争の時代に遡る。体操競技を政治的運動あるいは社会的運動として位置づけて、その初期の発展に貢献したのはフリードリヒ＝ルートヴィヒ・ヤーン（Friedrich Ludwig Jahn）[1] であった。彼は 1805 年にナポレオンとの戦いに敗れたプロイセンの将来を憂い、ドイツ・ナショナリズムの育成と若者の身体的強化の必要性を強く訴え、1811 年にベルリン近郊のハーゼンハイデに最初の体操練習場を開設した。1813 年にプロイセンがナポレオンに勝利すると、ヤーンの思想はプロイセンにとどまらず、オーストリア帝国下のドイツ系住民の間にも広まった。その影響力の強さのため、ドイツ・ナショナリズムの拡散を危

険視した当時のオーストリア帝国宰相メッテルニヒは、体操競技を禁止し、ヤーンを危険な革命思想の体現者として厳しく監視させた[2)]。

1848 年のウィーン革命においても革命運動の先頭には体操競技者たちの姿が見られた。同年 10 月、ウィーンにおけるこの未完の革命は、皇帝軍によって容赦なく鎮圧されたが、1860 年 10 月 20 日の「憲法（Oktoberdiplom）」によって、オーストリア市民には憲法上の基本権とあわせて、各種協会の設立も容認された。こうしてオーストリアにおいても体操協会の設立と、それを通じての体操競技の拡大が始まることになった[3)]。

当初、ドイツ語母語者の居住地に成立したすべての体操協会は、1868 年にヴァイマルで設立された「ドイツ体操協会（Deutsche Turn(er)schaft）」に属すこととされた。普墺戦争での敗北を受けて新たに誕生したオーストリア＝ハンガリー二重帝国のオーストリア側にある体操協会は、「体操管区第 15 ドイツ＝オーストリア（Turnkreis XV Deutsch-Österreich: 以下、第 15 管区）」という新しい管轄区域（旧ドイツ連邦に所属していたアルペン諸州、ベーメンなどの 15 の連邦州からなる管区）を構成して、「ドイツ体操協会」の傘下に入ったのである[4)]。

上部組織である「ドイツ体操協会」は、総体としてはリベラルな主張を旨としていたとされる。しかしながら、ユダヤやスラブの住民を多く抱えるウィーンの体操競技団体には、ドイツ民族主義的な主張が受け入れられやすい素地が存在していた。例えば、規約などに明文化されてはいなかったものの、1885 年時点でウィーンには「ユダヤを排除した」最初の体操競技団体が作られていたと言われる。ウィーン 17 区（ヘルナルス：Hernals）の男性競技者が集結する団体や 5 区（マリアヒルフ：Mariahilf）の団体などである[5)]。

当時、ウィーンに存在するドイツ民族主義的体操競技者のリーダーとして影響力を持っていたのが、「第 1 ウィーン体操協会」[6)] の上級幹部（Oberturnwart）、フランツ＝クサーヴァ・キースリングであった。

1859 年ウィーンで生まれたキースリングは、ドナウ河北部のヴァルトフィアテルを中心にフィールドワークを行う民俗学者・郷土誌研究者となり、多く

の著作をこの世に残した[7)]。キースリングは研究者としてのプロフィールを持つ一方、同じくヴァルトフィアテルを基盤とする著名な扇動政治家ゲオルク・リッター・フォン・シェーネラー（Georg Ritter von Schönerer）と親交があったこともあり、彼のドイツ民族主義や人種論的反ユダヤ主義の熱心な信奉者としても有名であった。よって、ここでは紙幅を割いてキースリングに多大な影響を与えたと思われるシェーネラーの思想と行動についても少々考察しておく必要がある。

### (2)　シェーネラーの反ユダヤ主義

シェーネラーは、1842 年に裕福な鉄道建設者の息子として生まれた。父親はその功績を称えられて爵位を得、ヴァルトフィアテルのツヴェットル近郊のローゼナウ城と周辺の領地を購入した。14 歳から 21 歳までの青年期をドイツで過ごし、ドイツの大学にも通ったシェーネラーは、当時のドイツ民族主義高揚の影響を受け熱烈なドイツの賞賛者となった（その一方で祖国のオーストリアを批判的に見るようになった）。1869 年以降、領地のローゼナウ城で農業経営に勤しみ、ツヴェットルでの農林協会創設に尽力したシェーネラーは、1873 年に帝国議会議員に選出され波乱に満ちた政治生活に入る。1876 年、オーストリア帝国議会でハンガリーとの「和協」状態に反対する立場を鮮明にしていたシェーネラーは、1878 年に議会でドイツとの統一要求演説を行い、ウィーンを中心とするドイツ民族主義派の学生から絶大な支持を獲得した。このドイツ民族主義派学生との関係の深まりによって、シェーネラーは反ユダヤ主義を強く意識するようになる[8)]。

1880 年代になると、シェーネラーの反ユダヤ主義は、従来から主張していたドイツ民族主義、反教権主義とならんで彼の重要な主張となった[9)]。彼が敵視したのは、迫害からオーストリア＝ハンガリー帝国に逃げ場所を求めたロシア帝国のユダヤ難民[10)] であった。すでに 80 年代初頭には、ロシアからのユダヤ住民流入反対請願を帝国議会に提出していたシェーネラーであったが、1887 年にも 37,068 筆の署名を含む 2,206 の大衆請願書を取りまとめて帝国議会に提

出し、改めてロシア帝国出身のユダヤ難民の流入に強く反対した[11)]。

こうしたシェーネラーの行動は大きな反響を呼んだ。それは、彼が帝国議会に請願を提出した翌 1888 年に、彼の領地があったヴァルトフィアテルに位置する 407 の町村が下オーストリア州の州知事に反ユダヤ請願書を提出し、ロシアからのユダヤ難民流入を露骨に批判したことからも明らかとなる[12)]。

以下本題に戻ることとするが、ここで見たように、シェーネラーと親交のあったキースリングが、自らが関わる「第 1 ウィーン体操協会」でその反ユダヤ主義的主張を鮮明にし始めるのは、ここで紹介したオーストリアの反ユダヤ主義台頭の時期と見事に重なりあっている。

### (3) キースリングと「アーリア条項」

キースリングは、民俗学者として下オーストリア州で研究活動を続けるかたわら、1882 年より「第 1 ウィーン体操協会」の体操理事会（Turnrat）で協会運営に従事していたが、1886 年 6 月 28 日に彼の下したひとつの決定が大騒動を引き起こした。それは、同協会の 25 周年を記念して実施予定となっていた史上初の「古代オリンピック 5 種競技（Hellenischer Fünfkampf）」の参加者から、キースリングが同協会所属のユダヤ会員 2 名を排除したことだった。排除の理由は、この競技が「アーリア的出自を有するドイツ人のみを想定している」から、とされた[13)]。

当時、ユダヤ会員に対して寛容な立場をとっていたオーストリアの体操協会理事会（18 人構成）は、こうしたキースリングの言動に態度を硬化させ、結局キースリングから「第 1 ウィーン体操協会」の指導権を剥奪した。これに対してキースリングは、盟友のドイツ民族主義者シェーネラーが所有する出版社から煽動的なパンフレット『ドイツ体操競技の敵（Feind deutscher Turnerei）』を出版し、体操協会理事会の対応を激しく攻撃した[14)]。

キースリングの過激な行動はこれにとどまらず、1887 年になると彼のイニシアチブによってオーストリアの複数の体操競技団体に「アーリア条項（Arierparagraph）」が導入されることになる。ここで述べる「アーリア条項」

の導入とは、キースリングが所属していた「第 1 ウィーン体操協会」の規約第 3 条が、1887 年 4 月 3 日にユダヤ会員の排除を定めたことを指している。当日の臨時総会で、キースリングは全出席者の 3 分の 2 の賛成を得ることに成功し、規約の改訂を達成した[15]。改訂箇所は、「協会に所属するものは（アーリア的出自の）ドイツ人に限られ、その入会は体操理事会によって確認される」[16] という部分であり、この規約内容はその後他の団体でも採用された[17]。

こうして歴史上初めて、スポーツ競技団体がユダヤ構成員の排斥に直結する「アーリア条項」を持つにいたった。同時に、団体のユダヤ会員（洗礼・未洗礼を問わず、つまり改宗か非改宗かを問わず）には、「団体から脱退するために 1887 年 7 月 31 日までの猶予があてられる」ことも決定された[18]。この条項の導入によって、400 人のユダヤ体操競技者が脱退を余儀なくされ、活動の表舞台から突然姿を消すことになったのである[19]。

一方、「自由と寛容の基本的価値を依然として堅持していたドイツ帝国の体操競技者たち」[20] は、キースリングの反ユダヤ主義とは断固として距離を保つ意志を鮮明にし、この問題をめぐって両者の間では長年にわたる対立が生じた。この対立は後に「体操をめぐる私闘（Turnfehde）」として歴史に刻まれた[21]。

一連の対立の結果、1889 年 1 月 27 日、「第 15 管区」の構成組織のひとつであった「下オーストリア州体操管区（Der Niederösterreichische Turngau）」に所属する団体のうち、キースリングを支持する 12 団体（「第 1 ウィーン体操協会」を含む）が、新たにキースリングを含めた 8 人委員会を結成することを決定した[22]。そして、この 8 人委員会の手によって新規約が策定されると、1889 年 10 月 6 日に開催された臨時の体操管区会議で「下オーストリア州体操管区」は、ウィーンを本部として創設された新上部組織「ドイツ体操同盟（Deutscher Turnbund: D.T.B.）」に移行するとの決定がなされた[23]。ちなみに、この「ドイツ体操同盟」は、結成間もない 1890 年 1 月 1 日時点で、すでに傘下団体 22 と構成員 2,690 人を抱えていた[24]。さらに 1904 年には「第 15 管区」そのものの「ドイツ体操協会」からの脱退が、5 月 29 日と 9 月 25 日に行われ

たウィーンの郡管区体操会議（Kreisturntage）で決定された[25]。

「ドイツ体操同盟」は、後年、他の民族主義的な体操組織を糾合して、より大きな反ユダヤ主義的団体へと変貌する。それが 1919 年 9 月 7 日にリンツで結成された「ドイツ体操同盟 1919（Deutscher Turnbund 1919）」であった[26]。この新団体についてここでは触れないものの、一連の発展過程に重要な役割を果たしたキースリングは、後年「体操競技者のシェーネラー（Schönerer der Turner）」と呼ばれることになった[27]。

1）フリードリヒ＝ルートヴィヒ・ヤーンに関する日本の研究書として以下がある。小原淳『フォルクと帝国創設――19 世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察』彩流社、2011 年

2）Österreichischer Turnerbund（Hrsg.), *50 Jahre ÖTB－1952 bis 2002*, Wels 2002, S. 6（http://www. oetb.at/fileadmin/Daten/Wirueberuns/Chronik/entstehung_aus_50_jahre_oetb_festschrift.pdf：2015 年 10 月 21 日閲覧）

3）Ebenda

4）Ebenda, S.7; Michael Wladika, *Hitlers Vätergeneration. Die Ursprünge des Nationalsozialismus in der k.u.k. Monarchie*, Wien / Köln/ Weimar 2005, S. 201

5）Gschwandtner, *a.a.O.*, S. 11

6）1861 年に創設された体操競技団体。創設者は 1848 年革命においてウィーンの学生義勇軍（Wiener Akademische Legion）の将校として重要な役割を果たしたユリウス・クリックル（Julius Krickl）であった。「第 1 ウィーン体操協会」に限らず、この時期に産声をあげた体操競技団体は、オーストリアにおけるドイツ民族主義的運動の結節点として機能していた。新しく創設された黒・赤・金の団旗はプロイセン＝ノルディック的志向をもつ団体員の象徴的儀式としてバルト海で洗礼されたとされる。Francis Louis Carsten, *Faschismus in Österreich. Von Schönerer zu Hitler*, München 1977, S. 10

7）キースリングの没年は 1940 年である。研究者としてのキースリングは上オーストリア州ヴァルトフィアテル北東部の旧石器時代の遺跡研究を主要テーマとし、代表的研究とされるものに、Das Plateaulehm-Paläolithikum des nordöstlichen Waldviertels von N.Ö., gem. mit H. Obermaier, in: *Mitt. der Anthropolog. Ges. in Wien*, Bd. 41, 1911, S. 1 ff. がある。また彼の略歴・業績を紹介した URL に以下がある。http://www. biographien. ac.at/oebl/oebl_K/Kiessling_Franz-Xaver_1859_1940.xml（2016 年 12 月 27 日閲覧）。

8）Carsten, *a.a.O.*, S.11ff.　シェーネラーに影響を与えた可能性のあるウィーンの学生組合には、大学内におけるユダヤ学生との競争激化を背景に、反ユダヤ主義的傾向を鮮明にするものも少なくなかった。例えば、1878/79 年の冬学期にウィーンの学生組合「リベルタス（Libertas）」は、その規約第 1 条を変更し、「洗礼をうけても、ユダヤはドイツ人ではない」と明確に規定したが、この規定はその後ウィーンやグ

ラーツ、そしてプラハの他の学生組合にも受け入れられている。以上は、Carsten, *a.a.O.*, S. 10f.

9）Ebenda, S. 14

10）1869 年の①ウィーンの人口数と②ユダヤの数（および人口比）はそれぞれ① 60 万 7,510 人と② 4 万 227 人（人口比 6.6％）であったが、1890 年には① 82 万 7,567 人と② 9 万 9,441 人（12.0％）へと急増している。これはウィーンの増加人口の実に 26.9％がユダヤの人々であったことを意味している。なお、これに 1890 年に新設された 11 区から 20 区を含めるとその数は① 136 万 4,548 人、② 11 万 8,495 人（8.7％）となる。Ivar Oxaal, *The Jews of pre-1914 Vienna: Two Working Papers*, Hull 1980, p. 60, aus: Steven Beller, *Vienna and the Jews 1867−1938. A cultural history*, Cambridge/New York/Port Chester/Melbourne/Sydney 1989, p. 44

11）Carsten, *a.a.O.*, S. 14

12）Ebenda, S. 15　この請願書には「ユダヤは（地区住民に）人道主義も寛容性も示すことのない異質な民族および人種である」こと、「嘘偽りを駆使して（地区住民から）持ち物を強奪し、（地区住民を）抑圧することを自分たちの権利と見なしている」こと、等が記されていたとされる。Carsten, *a.a.O.*, S. 15

13）Wladika, *a.a.O.*, S. 200.

14）Ebenda, S. 200f.

15）Ebenda, S. 201

16）Gschwandtner, *a.a.O.*, S. 11　原文は „Vereinsangehörige können nur Deutsche（arischer Abkunft）sein, deren Aufnahme vom Turnrathe bestätigt wird.“ であった。

17）筆者の手元にあるオーストリア国立図書館所蔵の「ドイツ体操協会オッタクリング（Deutsche Turnerschaft Ottakring）」の会則（Satzungen）第 4 条（全 25 条）「入会条件」には「会員になれるのはドイツの民族系統に属し、品行方正な評判と経歴をもち、少なくとも 18 歳に達したアーリアの出自である男性および女性のみである」と記されている。*Satzungen des Vereines „Deutsche Turnerschaft Ottakring“ in Wien*, Nekham/Wien（o.J.）, S. 2　この地区組織はその名称が示すように本来は穏健派の「ドイツ体操協会」の支部組織であったが、本文で見た 1889 年の一連の混乱の中、キースリングを支持した 12 団体（後述注 22 を参照）のひとつとして「ドイツ体操協会」から除名され、のちに 1889 年創設の「ドイツ体操同盟」に合流している。つまりこの作成年が記載されていない規約は、1887 年 4 月から 1889 年 10 月までの間に策定されたものと推測できる。

18）Gschwandtner, *a.a.O,* S. 13

19）Hajo Bernett, „Der Aufstieg der jüdischen Sportbewegung und ihre Zerschlagung durch das Hitler-Regime“, in: Jüdisches Museum der Stadt Wien（Hrsg.）, *a.a.O.*, S. 75

20）Ebenda

21）Gschwandtner, *a.a.O.*, S. 13　なお、キースリングは 1900 年から 1905 年にかけて『民族的な体操をめぐる私闘の歴史に関する寄稿』と題する大部のパンフレットを発行して、彼の立場を弁明している。Franz Kießling（Verfasst von）, *Beiträge zur Geschichte der völkischen Turnfehde*, Wien 1900−1905

22）Wladika, *a.a.O.*, S. 203 なお、この 12 団体とは、1.W.T.V.、TV（Turnverein）-Zwettl、TV-Sechshaus、TV-Mariahilf、TV-Ottakring、TV-Penzing、TV-Jahn-Währing、

TV-Obergrund、TV-Krems、TV-Tulln、Turnerverbindung „Deutsche Wacht“、Turnerverbindung „Friesen“であった。Wladika, *a.a.O.*, S. 203

23）Ebenda

24）Ebenda, S. 204

25）Gschwandtner, *a.a.O.*, S. 13

26）Ebenda, S. 14 ここで統合された団体は、Der Turnkreis Deutsch-Österreich、Der Deutsche Turnerbund 1889, Der Verband alldeutscher Turnvereine “Arndt”の 3 つであった。また、当時のオーストリアには民族主義的な Deutscher Turnerbund 1919 以外にも、労働者の体操競技団体である Deutscher Arbeiter Turn- und Sportbund と保守・キリスト教系団体の Reichsverband Christlich Deutsche Turnvereine Österreichs があった。Österreichischer Turnerbund（Hrsg.), *a.a.O.*, S. 8 の „Turngeschichtliche Verbandsübersichttafel“ を参照。これらにシオニストのハコアが加わる。

27）Wladika, *a.a.O.*, S. 204

## 2. シオニストの対応：マックス・ノルダウの「逞しきユダヤ」思想

### (1) 第 2 回シオニスト会議におけるノルダウ演説

「第 1 ウィーン体操協会」が、1887 年に「アーリア条項」を導入し、その後多くの体操団体がこれにならってユダヤ会員を排斥しはじめると、ユダヤ側もこれに異議を唱え始める。

その代表例が、1898 年 8 月 28 日バーゼルでの第 2 回シオニスト会議[1] の席上、会議創設者のテオドール・ヘルツルの盟友、マックス・ノルダウ[2] によって提唱された「逞しきユダヤ」という新しい概念である[3]。ノルダウは、ラビ（ユダヤ教僧侶）を父親に持つブダペスト生まれ（1849 年 7 月 29 日）のユダヤ知識人である。彼はパリを活動拠点とした作家、医師および文化批評家であると同時に、シオニズム運動の代表的指導者としても名を知られた人物であった。ヘルツルが組織した第 1 回シオニスト会議（1897 年）で、ノルダウは主催者ヘルツルの次に登壇し演説した。その演説はヘルツルによって高く評価され[4]、彼の名前は一躍ユダヤ社会の中で広く認知されることとなった。

さて、問題の第 2 回シオニスト会議での演説内容を検討してみよう。後に製

本された演説記録[5] をみると、ノルダウは冒頭でロシア、ルーマニア、ガリチアにおける「憂慮すべき反ユダヤ主義」の現状に触れたのち、フランスの反ユダヤ主義と当時多くの人々の関心を集めていた「ドレフュス事件」の背景を、演説草稿全 19 ページのうち実に 3 分の 1 近い分量を割いて解説し、フランス社会を厳しく批判した[6]。

続いて演説は、シオニズムの意義に移り、さらにくだんの「逞しきユダヤ」という文言が含まれる一文が登場する。この新造語が登場するのは、演説草稿の 15 ページ目の末尾あたりである。

ノルダウはこの前段部で、「反ユダヤ主義的な行動と騒乱が、西欧でも東欧でも活発になっている」[7] と指摘したうえで、持論の「逞しきユダヤ」について、以下のように述べた。

「シオニズムはユダヤ性を新たに覚醒させてくれる。このことを私は確信している。シオニズムは、道徳的には民族の理想を刷新することを通じてユダヤ性の覚醒に影響を与える。またシオニズムは、肉体的には若者の身体的教育を通じて、ユダヤ性の覚醒に影響を与えることになる。そしてその若者とは我々に、失われし『逞しきユダヤ』を再び作り出してくれるはずの存在である」[8]。これに続けて、ノルダウは「失われてしまった逞しきユダヤ」という思想をかつて体現していた人物が、バル・コクバ（Bar Kochba）であることを明らかにする[9]。

なお、紀元 2 世紀、ローマ帝国に対する「第 2 次ユダヤ反乱（131 年の晩秋か翌年早々に勃発）」を指揮したこのカリスマ的指導者は本来シモンという名であったが、キリスト教の伝承が彼を後にバル・コクバ（星の子）というあだ名で呼ぶようになったため、こちらの呼称が有名となった。バル・コクバのカリスマ性は「驚異的な身体上の力」にあったと言われている[10]。

### ⑵　ノルダウのその後の主張

各地のユダヤの人々に強烈な印象を残したこの第 2 回シオニスト会議の後も、ノルダウは欧州各地で精力的に講演活動を実施し、シオニズムの意義をユ

ダヤの聴衆に直接訴えかけていく。1997 年に刊行された『世紀末の心理病理学：文化批評家医師およびシオニスト、マックス・ノルダウ（Psychopathologie des Fin de siècle: Der Kulturkritiker, Arzt und Zionist Max Nordau）』によると、ノルダウは第 2 回シオニスト会議の翌 1899 年 1 月 26 日、ウィーンで 2,200 人の聴衆を前にシオニズムをテーマにした講演会を行っている。その 2 日後の 28 日にはベルリンで 4,500 人を集めて講演し、パリへの帰途立ち寄ったケルンでも当地のシオニスト達に持論を展開している[11)]。

ちなみに、第 3 回シオニスト会議（1899 年 8 月 15 日於バーゼル）および第 4 回シオニスト会議（1900 年 8 月 13 日於ロンドン）において、ノルダウは「逞しきユダヤ」について言及していない。しかし、再びバーゼルに会場を移した 1901 年 12 月 27 日の第 5 回シオニスト会議では、「逞しきユダヤ」思想を発展させることの必要性を明確に説いている[12)]。

シオニスト会議に代表される公式の場や講演会などでの演説にとどまらず、ノルダウはこの頃、批評家としての文筆活動においても精力的に「逞しきユダヤ」概念の啓蒙を行い、その実践形式として体操競技活動の重要性を発表している。

例えば、1900 年 6 月『ユダヤ体操新聞（Jüdische Turnzeitung）』に掲載された「逞しきユダヤ」という表題の論説で、ノルダウは「かつて存在した逞しきユダヤ」の概念を体現する歴史上の人物として再びユダヤの英雄バル・コクバを紹介し、さらにこの英雄の名前を冠してベルリンに創設された新しい体操競技団体の意義について次のように述べる。

> 「体操競技が重要な教育的課題をもつのは、我がユダヤの人々以外、どの民族にもあてはまらない。体操競技は肉体的にも、人格形成という点でも我々を育て上げてくれるはずだ。体操競技は我々に自我を与えてくれよう。.....。
>
> 我々の新しい逞しきユダヤの人々（Muskeljuden）は先祖が持っていた英雄性を取り戻してはいない。先祖たちは大勢で競技場に足を踏み入れ、

競技に参加し、訓練されたヘレニズムのアスリートや力強い北欧の野蛮人たちと競い合ったのだ。しかしながら、新しい逞しきユダヤの人々は道徳的には今日、すでにかの者達よりも高みに立っている。我々が、憤慨するラビたちの懲罰説教を通じて知っているように、古のユダヤの闘技場の戦士達は自分たちのユダヤ性を恥じて、外科的トリックによって結束の印（割礼を指すと思われる：筆者補）を隠そうとしたからである（というのも古代のアスリートは通常裸で競技に参加したためである：筆者補）。その一方で『バル・コクバ』の構成員たちははっきりと、そして自由闊達に、自分たちの部族を支持すると表明している。

ユダヤ体操競技団体が咲き誇り、隆盛をきわめんことを。そしてあらゆるユダヤの生活の中心となる模範とならんことを！」[13)]

また、1902 年 7 月発行の『ユダヤ体操新聞』にも「われわれユダヤにとって体操競技はどんな意味を持つか？」というテーマの論説を発表している。ノルダウはそこで頭脳とともに肉体を鍛える必要性を強く説く。そして体操競技が健康を強化し、逞しく肉体を発達させ、さらには美を促進するのに効果的であると述べたうえで、それ以外にも、自己意識を強め、これまでの強情で相互承認を拒んできたユダヤには欠けていたもの、つまり一つの目的に向かってともに努力する共同活動の意義を教えてくれる高い教育的価値をもつと評価する[14)]。

この論説のなかで興味深いのは、ノルダウが当時ドイツ、オーストリアの若者の間で人気が出始めていたサッカーを「粗暴（roh）で愚鈍な（geistlos）」スポーツ競技と評して否定的にとらえていたことである[15)]。

粗暴なだけではなく、本家の英国ではすでにプロ・スポーツとして定着していたサッカーは、ノルダウにとってはまさに忌避すべきものであった。後年の著述によって明らかになるのであるが、彼にとっては、サッカーに限らず賞金獲得や記録向上を目標とするスポーツやその選手は批判の対象であった。ノルダウはスポーツを「利己的で物質的な事柄」とみなし、これとは逆に、体操競

技を個人にも集団にも有益な肉体の「調和的教育」を保証する手段と見なしていた[16)]。

### (3) 「逞しきユダヤ」の由来

この章の締めくくりとして、ノルダウの「逞しきユダヤ」思想はどこから来たのかについても少し検証する必要があるだろう。これまでの主要なハコアの研究書を紐解いてみても、この点に踏み込んだ考察は皆無に等しい。ただ、ダニエル・ワイルドマン（Daniel Wildmann）が 2011 年に発表した論稿が、興味深い仮説を提示しているのでここで紹介しておく。

ワイルドマンは、1849 年生まれのノルダウが 19 世紀中頃にイギリスで出版されたふたつの小説を読み、そこから彼が「逞しきユダヤ」思想についての着想を受けた可能性を指摘している。そのひとつは 1856 年にイギリスの法律家で著述家のトーマス・ヒューズ（Thomas Hughes）が発表した『トム・ブラウンの学校生活（Tom Brown's School Days)』である。イギリス文学の古典として有名なこの小説は、世間が高く評価する私立学校に学ぶ少年がスポーツと信仰を通じて成長する過程を描いたもので、当時のイギリスでは大変な人気を博したとされる。もうひとつは、1857 年に英国国教会の聖職者で小説家でもあったチャールズ・キングスレー（Charles Kingsley）が、コレラを社会的・衛生的問題として扱った『2 年前（Two Years Ago)』である[17)]。

このふたつの小説に共通するのは、身体的強さと国教会への揺らぎない信仰を併せ持つ主人公が登場することである。彼らは、世界を形作りその世界を支配する能力を有し、また神と祖国に奉仕するため戦争に赴く覚悟を常に抱くイギリスの男として描かれている[18)]。

肝心のノルダウのユニークな概念の出所として、ワイルドマンは「逞しきキリスト教（muscular Christianity)」という概念を提示する。この用語を初めて使用したのは文筆家の T. C. サンダース（T. C. Sandars）であり、キングスレーの小説に対する批評（1857 年）の中であったとワイルドマンは推論している[19)]。

ノルダウが 19 世紀中頃のイギリス文壇の影響を受けたのか否かについてここで論じ切ることはできないものの、両者の間には明確な類似性が存在する。

1）第 1 回シオニスト会議は、著名なウィーンのジャーナリスト、テオドール・ヘルツルの提唱によって、1897 年 8 月 29 日から 31 日にかけてスイスのバーゼルで開催された。各国のユダヤ評議会が選出した 197 名の代表が参加した第 1 回大会の模様については、ラカー、前掲書、153−158 頁、を参照。
2）マックス・ノルダウの経歴等については以下を参照。Nadia Guth Biasini, „Max Nordau“, in: Heiko Haumann（Hrsg.）, *Der Erste Zionistenkongress von 1897. Ursachen, Bedeutung, Aktualität*, Basel / Freiburg / Paris / London /New York / New Dehli /Bangkok /Singapore /Tokyo /Sydney 1997, S. 167
3）Karl Haber, „Kleine Chronik der Hakoah Wien − Teil I: 1909−1938“, in: Jüdisches Museum der Stadt Wien（Hrsg.）, *a.a.O.*, S. 23
4）第 1 回シオニスト会議におけるノルダウ演説についての簡略な紹介については以下を参照されたい。ラカー、前掲書、155−156 頁および 554−555 頁。この日のノルダウの演説をヘルツルは「我々の時代の記念碑」、「青銅よりも長続きする記念碑」と述べとても高く評価している。ラカー、前掲書、156 頁。
5）この日のノルダウ演説の全文は以下を参照。II. Kongressrede（Basel 28. August 1898）, in: Zionistisches Aktionskomitee（Hrsg.）, *Max Nordau's Zionistische Schriften*, Köln/Leipzig 1909, S. 58−76
6）ノルダウの「ドレフュス事件」およびフランスの反ユダヤ主義批判については、II. Kongressrede（Basel 28. August 1898）, in: Zionistisches Aktionskomitee（Hrsg.）, *a.a.O.*, S. 61−66 を参照。
7）Ebenda, S. 68
8）Ebenda, S. 72
9）Ebenda
10）以上は、S. ヘルマン/W. クライバー（樋口進訳）『よくわかるイスラエル史 ── アブラハムからバル・コクバまで』教文館 2003 年初版 2004 年再版、194−195 頁を参照。
11）Christoph Schulte, *Psychopathologie des Fin de siècle: Der Kulturkritiker, Arzt und Zionist Max Nordau*, Frankfurt am Main 1997, S. 306
12）V. Kongressrede（Basel, 27. Dezember 1901）, in: Zionistisches Aktionskomitee (Hrsg.), *a.a.O.*, S. 132
13）Max Nordau, „Muskeljudentum“ in: „Jüdische Turnzeitung“, Juni 1900, aus: Zionistisches Aktionskomitee, *a.a.O.*, S. 380f.
14）Max Nordau, „Was bedeutet das Turnen für uns Juden?“, in: Jüdische Turnzeitung, Juli 1902, aus: Zionistisches Aktionskomitee (Hrsg.), *a.a.O.*, S.382
15）Ebenda, S. 386
16）Daniel Wildmann, „Muskeljuden, turnende Juden und moralische Juden“, in: Gisela Dachs u.a.（Hrsg.）: *Sport. JÜDISCHER ALMANACH der Leo Beck Institute*, Berlin 1.Auflage, 2011, S. 111

17）Ebenda, S. 104f.
18）Ebenda, S. 105f.
19）Ebenda, S. 105 ただし 1960 年に発表されたある論文によると「逞しきキリスト教」という語が初めて登場したのはキングスレーが書いたクリミア戦争出征兵士徴募用の宣伝小説『ホー！（Westward Ho!)』（1855 年）であったとされる。詳細は William E. Winn: "Tom Brown's Schooldays And The Development Of 'Muscular Christianity'", in: *Church History*, Vol. 29, No. 1（Mar., 1960）, p. 66 を参照。（ここでは https://writingbio.qwriting.qc.cuny.edu/files/2011/08/tombrownmuscularchristian.pdf 掲載の pdf 版を使用 : 2016 年 12 月 27 日閲覧）

## 3. ユダヤ体操競技団体の成立

ノルダウの呼びかけはユダヤ社会の反響を呼び、彼の提唱した理念の実現化の試みがユダヤ民族主義者やシオニストグループを核としてヨーロッパの各地で始まった。1898 年ベルリンに体操競技団体「バル・コクバ」が誕生し、これが後のユダヤ会員によって運営される体操連盟発展の基盤となった。ユダヤの記憶に深く刻まれたこの歴史的な名前を冠したベルリンの体操競技団体では、ユダヤ民族主義的な思想の育成が施されることになった[1)]。

ここで言うユダヤの民族主義的思想の育成とは何であろうか。それは、言い換えれば、ユダヤの出自と歴史に対する共通認識をメンバー間に育成するということである。ベルリンの体操競技団体「バル・コクバ」は、1900 年から『ユダヤ体操新聞（Die Jüdische Turnzeitung)』を発行したが、その紙上にもこうしたユダヤの共通認識を育成することの重要性が謳われていた。曰く、この新聞の目的は「消滅に向かいつつあるわれわれの団結という感情と、喪失気味の自信を高めるため」と説明されていた[2)]。ちなみに、『ユダヤ体操新聞』が発行された 1900 年 5 月時点で、ベルリンにはすでに 11 を数えるユダヤ体操競技団体が存在しており、団員総数はおよそ 700 名に及んだとも言われている[3)]。

ベルリンでの動きに並行して、ウィーンでも 1900 年前後から新しいユダヤ体操競技団体を創設する動きが見られた。反ユダヤ主義に晒されていたウィーン大学において、スポーツ団体に所属するユダヤ学生が、1896 年夏学期の始め、学内でのドイツ民族主義系学生の脅威に対抗すべく自分たちの身体強化を

はかる動きをみせた。こうしたスポーツ好きのユダヤの学生たちは、体操プログラムの改善に向けて、1899 年 6 月 28 日に「ユダヤ学生体操競技団体」に結集した。しかし、その活動は思う様に順調には進まなかった。市当局がこの団体に体操ホールの貸し出しを拒否したためであり、結局彼らは民間の体操学校で夜間練習を行う羽目におちいった。団体存続のため、ユダヤ学生の体操競技団体は、同じく困難に直面していたユダヤ労働者の団体とともに、1900 年 10 月、テオドール・ヘルツルも所属していたより大きな「第 1 ウィーン・ユダヤ体操協会（Der Erste Wiener Jüdische Turnverein：1899 年創設）」に加入し、活動を継続していくことになる[4)]。

「第 1 ウィーン・ユダヤ体操協会」のメンバー数は 1901 年 11 月時点で 193 人、翌年初めには 250 人を超えていたとされる[5)]。この団体の活動は至極活発で、1903 年 4 月 4 日には自分たちの練習場を飛び出し、ウィーン・ロナッハーにある舞踏会ホールで初めて体操競技披露会を行っている。またこの団体では、体操の練習だけではなく、重要な活動の一環として、文化的・イデオロギー的な教育活動も行われていた。1907 年には団体内にこの任務を担当する「若きユダヤ（Jung Juda）」と呼ばれるセクションが創設された。この新設部局は「民族主義的ユダヤ思想（Der national-jüdische Gedanke）」の宣伝をその目標に設定しており、シオニズムは当然のことのように団体メンバーの間に広められた。協会内にあったユダヤ学生の読書・談話室では、毎週「民族としてのユダヤ」思想やユダヤの歴史、さらにはユダヤ文学に関する報告会と討論会が開かれた。そこでユダヤのスポーツ選手は、常に自分の出自を意識してそれを恥じるのではなく、その出自のために戦うべきことを学習することになっていた。団体の公式機関紙は、ベルリンのユダヤ体操競技団体「バル・コクバ」と共同発行した週間新聞『ユダヤ体操新聞』であった。ノルダウも度々寄稿したこの新聞は、1900 年 5 月から 1921 年末まで 1 号も欠落することなく発行された[6)]。

体操競技を広め、シオニズムを宣伝するための多面的な活動こそ、「ユダヤ体操競技団体の父」ノルダウが強く望んだことであり、そうした意味では、

「第1ウィーン・ユダヤ体操協会」は文字通りシオニストにとっては模範的な存在となった。

なお、「第1ウィーン・ユダヤ体操協会」に限らず、ウィーンを中心にしてオーストリアでは、この後も各地に類似のユダヤ体操競技団体が成立していく。ある研究によれば、1909年のハコア創設後、1913年までにさらに6つのユダヤ体操競技団体が成立したとされる[7)]。

1）Bernett, *a.a.O.*, S. 76
2）Ebenda
3）Schwaiger, *a.a.O.*, S. 8
4）Michaela Gangl, „*Hoppauf, Herr Jud!" Aspekte jüdischen Lebens im Wien der Zwischenkriegszeit am Beispiel Friedrich Torberg*, Wien 1998（Diplomarbeit der Universität Wien）, S. 50; Bernett, *a.a.O.*, S. 76
5）Gangl, *a.a.O.*, S. 51
6）Ebenda
7）Gschwandtner, *a.a.O.*, S. 18

## 4. 新時代のユダヤ・スポーツ団体（ハコアの創設）

19世紀末ウィーンの体操競技団体にみられた反ユダヤ主義的潮流と、それに対抗すべく設立されたユダヤ体操競技団体結成にいたる前章までの記述は、いわばハコア研究の前史的部分をなす。ユダヤ会員のみを結集して1909年にウィーンに創設されたスポーツ団体ハコアも、勿論こうした一連の流れの中に位置付けることが可能である。ハコアはその活躍によって、結成後数年のうちに多くの会員と支援者を集めるまでに発展していく。

しかしながら、単純にハコアを他のユダヤ体操競技団体と同列に論じることはできない。それはハコアが他のユダヤ体操競技団体とは異なり、ノルダウが熱心に推奨した体操競技部門をもたないオールラウンド型のユダヤ・スポーツ競技団体として成立したことと関係している。また本稿でも紹介したように、ノルダウはイギリス渡来の新興団体球技であるサッカーを批判したが、ハコアの代名詞とでも言うべき看板競技部門がサッカーであったこと自体、とても興

味深い。

では、ハコアにおいては何故、体操が採用されず、サッカーが中心競技となったのか。その理由として、ハコアの成立時期が 1898 年のノルダウ演説から 10 年あまりの歳月を経ていたことが挙げられる。あらためて言うまでもなく、1900 年にドイツ・サッカー連盟（DFB）、1904 年にオーストリア・サッカー連盟（ÖFB）が誕生し、サッカー競技が興隆期を迎えた頃に、ハコア設立が重なったことは偶然ではない。当時のドイツやオーストリアの若者がいささか古風で厳格な雰囲気をまとう教育的競技とでも言うべき体操ではなく、新興スポーツのサッカー競技を好んだのは明らかに時代の変化という要因があったからに他ならない。イギリス渡来のサッカーがユダヤの若者に愛された理由をあるサッカー史の専門家は次のように説明している。

「英国スポーツとそのオープンな競争思想は、欧州のユダヤを強く抑圧していた古い身分制社会のコンセプトとはいわば正反対の関係にあった。ユダヤ市民がスポーツに関心をもったのは、永遠に続く反ユダヤ主義への反作用でもあった。スポーツの中に人々は社会的統合と受容の可能性を見ていた。というのも、歴史的重荷から自由なスポーツ運動は、当初、保守的で民族主義的な価値でいっぱいの体操競技運動よりはずっとリベラルで世間に対してより開かれていたからだ。

体操競技はフランスの占領に対する戦いの中で民族主義的な身体育成の手段として台頭した。フリードリッヒ＝ルートヴィヒ・ヤーンはドイツ的・キリスト教的な国民国家の先駆者であり、反ユダヤ主義的な傾向を強く帯びていた。それゆえ、ユダヤ青年は、その英国的由来がより好まれたサッカー・スポーツに望みを託したのだ。

サッカーは体操競技とは異なり、身体的に負荷のかかる行為というだけではなく、創造的で楽しみも多いという行為でもあったのだ。....。個性と表現の自由を残してくれる、『知的で創造的で』加えて『個を重視するチームスポーツ（egoistischer Teamsport)』として、サッカーは若く、開

放的な市民に対しては強力な魅力を発揮した」[1)]。

オーストリア・サッカー連盟誕生を受け、サッカーに対するポジティヴなイメージが急速に社会に広まりつつあった 1908 年、ある親善試合がウィーンで開催された。これがハコア成立を後押しする直接のきっかけとなった。

この親善試合では、ブダペストを本拠としヨーロッパで最も長い歴史をもつユダヤのサッカークラブ（Vivó és Athlétkai Club Budapest）と、ウィーンの「ヴィエンナ・クリケット＆サッカークラブ（Vienna Cricket and Football Club）」の補欠チーム（Reserve）が対戦した。まさにこの試合の裏でハコア創設の提案がハンガリーチームからなされたようである[2)]。

第 1 次世界大戦後の 1920 年代に書かれたと思われるハコアのパンフレット『ハコア：4 部から 1 部への道（Die Hakoah. Ihr Weg von der vierten in die erste Klasse）』は、ハコア成立の経緯を次のように説明している。

「ブダペストのリーダーであったリポット・ヴァイス博士（Dr. Lipott Weiß (*sic*)）[3)] が、同様の考えをもつウィーンの人々にクラブ創設を鼓舞し、彼らに側面から助言と支援を与えた。これを受けて、ダヴィッド・ヴァインベルガー博士（Dr. David Weinberger）[4)] と彼の兄弟たちの指導下にあり、スポーツに熱狂するウィーンのユダヤ学生たちは、事実上、ハコアという名前を冠する団体の創設にむけて一歩を踏み出したのである」[5)]。

ハコアの初代会長に就任したのは、„Beda“ という愛称で知られていた作家フリッツ・レーナー（Dr. Fritz Loehner）[6)] であった。彼の指導と、第 1 次世界大戦で戦死することになるヴァインベルガーの尽力によって、この小さな新しいクラブは活発に活動してくことになる[7)]。

レーナー会長の最初の大仕事は、公式戦に参加するために、下オーストリア州サッカー連盟への加盟申請を認めてもらうことであった。こうして、1909 年初頭に新しいクラブの規約（Statuten）が役所に提出され、1 年後に下オーストリア州サッカー連盟への入会が認められた[8)]。

ただし、申請認可が問題なく進んだわけではなかった。ハコアの新規加入の

障害となったのは、当時の下オーストリア州サッカー連盟会長が、民族主義的な色彩を前面に出すクラブチームの加盟を懸念したことであった[9)]。しかし、ウィーンの古参サッカー・クラブ、ヴィエンナ（Vienna）の会長を長年勤めたハンス＝マルティン・マウトナー（Hans Martin Mauthner）[10)] が、この小さなユダヤ・クラブの参加に対して少なくとも正面から「反対の意思表示をしなかった」[11)] ことが、ハコアの認可に有利に作用した。とは言え、会長と同じくハコアに対して少々懐疑的であったマウトナーは次のように述べたとされる。

「ハコアは現段階では取るに足らない団体として連盟に参加するものの、小さいままでは止まらず、全精力を費やして（大きくなろうと）努力するであろう」と述べ、さらに「われわれは、大きな影響力を持つことになりうる民族主義的なクラブに連盟への入り口を保証してやるのだ、ということをしっかりと心しておかねばならない」と居並ぶ面々に注意を喚起したとされる[12)]。

彼らが懸念したのは、ハコアが単なるユダヤのスポーツ友愛団体にとどまらず、反ユダヤ主義と正面から戦う意志を示し、ユダヤ民族主義やシオニズムを推進する役割を当初から強く意識していたことである。

その証左として、1909 年のハコア結成時に定められた、組織の重要目標を見てみよう。曰くハコアの目標とは、

「1）　他の団体で公然、非公然を問わず、反ユダヤ主義や『アーリア条項』のために活動することが不可能となっているすべてのユダヤのスポーツ選手を糾合すること、

2）　体力あるいは身体的機能の形成と結び付けられた力（運動能力：筆者）を育成し、それを用いることによってユダヤの戦闘力（Wehrhaftigkeit）とユダヤの自覚（Selbstbewusstsein）を訓練すること、

3）　ユダヤ以外の住民の中で最高の教育を受けた人々と比べてユダヤが体力と能力においていささかも劣ってはいないことを、世間、ユダヤ、非ユダヤ、彼らのなかに含まれる反ユダヤ主義者に対してはっきりと証明すること、

4) ユダヤの民族的自覚を促進すること、」[13)]

であった。

ハコアの指導者たちには確信的なシオニストが多かったが、これらの目標には明確なシオニズムという言葉は使用されていない。それは指導者たちの熟慮の結果である。当時の社会ではシオニズムは過激な革命思想にも類せられ、万人に受け入れられた訳ではなかったからである。シオニズムは当然のように、反ユダヤ主義者の攻撃の的になったし、ユダヤであることをむしろ隠してウィーン社会との同化をめざした多数派の「同化ユダヤ」からは嫌悪の眼差しで迎えられた。こうした環境の中でシオニズムを前面に押し出すことは、ハコア加入を躊躇する若者や、ハコアと子供が関係を持つことを嫌う親たちの増加を招くことが予想されたため、あえて「ユダヤの民族的自覚の促進」という比較的穏やかな表現が使用されたのである[14)]。

設立当初はさておき、その後はハコアがシオニスト団体であることを隠そうとした痕跡はない。むしろその逆であった。ハコアは 1921 年に創設された国際的なユダヤ・スポーツ連盟「マカビ（Makkabi）」に加盟していたが、この国際スポーツ機構がシオニズム運動に賛同する目的で設立されたことはよく知られていた[15)]。

また、機関紙などの定期刊行物にもハコアがシオニスト団体である事実は明確に記載されていた。例えば、1932 年 2 月発行の『ハコア水泳クラブ通信（Nachrichten des Schwimmclubs Hakoah）』には、冒頭の設立趣旨に「ハコアはノルダウの言葉を実現するために設立された」[16)] とあるように、クラブとシオニズムの密接な関係は明確にされている。

さらに、ノルダウの思想がハコアの活動の中で意識的に世間の目を引く形で実践されていたことも広く知られている。その具体例として、ノルダウがかつて新聞論説の中で嘆いた古のユダヤ戦士の対応（ユダヤの印の隠匿）とは対照的に、ハコアの選手たちが例外なくユダヤの象徴である「ダヴィデの星」を胸に大きくあしらって（つまり顕示して）あらゆる競技に臨んだことを挙げてお

こう。

つまりハコアのメンバーは、── かれらが全員、シオニズムに傾倒していたかはさておき ── 自分たちが民族主義派やシオニスト派ユダヤの一員であることを身をもって体現していたのである。

1）Dietrich Schulze-Marmeling, „Aus der Geschichte gedrängt: Der deutsche Fußball und seine Juden,“ in: Gisela Dachs, *a.a.O.*, S. 75

2）*Die Hakoah. Ihr Weg von der vierten in die erste Klasse*, Wien（o.J.）, S. 3

3）Dr. Lipót Weiss: リポットはウィーンのハコア創設者のひとりで、ブダペストの「Vivó és Athlétkai Club（Budapest）」の共同創設者でもあった。大学で医学を学んだ後（医学博士）、第 1 次世界大戦前後にはウィーンに滞在し、自由時間のすべてをハコアとりわけレスリング部門に捧げている。スポーツ競技に精通していたリポットは、ブダペストの非ユダヤ団体から多くのユダヤ選手（水泳競技者、レスリング競技者）をウィーンのハコアに招請し、その技術を教授させることに熱心だった。リポット自らもシオニズムの教師役として部門から部門へと渡り歩いた。1923 年、彼はシカゴに移住し、当地でもシオニズム的スポーツ活動の中心人物となった。以上は、Ignaz Hermann Körner, *Lexikon jüdischer Sportler in Wien 1900−1938,* Wien 2008*,* S. 222 の記述を参考にした。

4）Dr. David Weinberger: ヴァインベルガーは学生時代から優秀なスポーツマンとしてサッカーに励んでいた。彼の夢は社会民主党系、ブルジョア系を問わずすべてのユダヤのスポーツマンを結集するスポーツ・クラブを創設し、シオニズムを広めることであった。ヴァインベルガーは 1909 年初頭、ウィーンのシオニズム地区委員会議長に自分の夢を語り、この議長からシオニズム組織の会長ヴォルフゾーン（Wolffsohn）がウィーンにおけるスポーツ・クラブ実現を望んでいることを知る。ヴァインベルガーは兄弟のザロモンおよびオットーとともにハコアの共同創設者のひとりとなった。同時に彼は重要なハコア支援者でもあり、ハコアの初代副事務局長に就任したが、出征した第 1 次世界大戦において戦死している。以上は、Körner, *a.a.O.*, S. 220f. の記述を参考にした。

5）*Die Hakoah*, *a.a.O.*, S. 4

6）Dr. Fritz Beda-Löhner: レーナー（法学博士）の詩や文学作品はよく知られていた。ハコア創設時には初代会長に選出され、第 1 次世界大戦勃発までこの地位にとどまった。戦前、彼が毎年主催し、戦後も数回開催された「Beda の夕べ（Beda-Abende）」はとても人気を博し、その収益はクラブに多大な利をもたらした。1921 年、レーナーはハコアの名誉会員に任命され、後年の会長不在期には 1 年間だけ会長職に選出された。ナチによる独墺合邦直後、強制収容所に収監されひどい扱いと苦しみを受けた。以上は、Körner, *a.a.O.*, S. 142 の記述を参考にした。

7）*Die Hakoah, a.a.O.*, S. 4　ハコア設立メンバーのひとりであったアルトゥール・バール（Arthur Baar）の回顧録によれば、公式の設立集会は 1909 年 9 月 26 日、ウィーン 9 区（Hörlgasse 11）にあった「ユダヤ学生の読書・演説ホール（Lese- und Redehalle jüdischer Hochschüler）」のクラブ酒場で実施された。この集会には数人の

シオニズム指導者（大抵は博士号保有者）も参加していたとされる。Arthur Baar, *Fußballgeschichten. Ernstes und Heiteres. Hakoah*, Wien, Israel 1974, S. 7

8）*Die Hakoah, a.a.O.*, S. 4

9）Ebenda　なお前掲のバールの回顧録によれば、この会長はプラハ出身のユダヤ Dr. Ignaz Abeles で、ハコアからの入会申請書が読み上げられた時、あからさまに不快感を隠そうとはしなかった、とされる。Baar, *a.a.O.*, S. 14

10）Hans Martin Mauthner については Körner, *a.a.O.*, S. 154 も参照。

11）*Die Hakoah, a.a.O.*, S. 4 バールの回顧録も、長時間に渡った会議でハコア加入問題についての最初の発言者は改宗ユダヤで、当時は Vienna の役員（無記名）であったと記している。この役員は民族主義的クラブとくにユダヤ民族主義的クラブを加入させることが「危険な先例となる」ことに「深い憂慮の念を述べた」とされる。これに対して、ハコア加入に賛同したのが S.C. Rapid の（バールの記憶では恐らく）Dyonis Schönecker で、彼は「一番下のクラスの小さなクラブなど何の害にもならない」と述べたとされる。議論の応酬は続いたが、結局ハコアは 1910 年に加盟クラブ急増を理由として新設された最下層の II.C クラス（旧来は 3 クラスであったが 4 クラスに増設）への加入が認められた。Baar, *a.a.O.*, S. 14f.

12）Ebenda

13）Bunzl, *a.a.O.*, S. 24

14）Monika Löscher: „...aus den verlachten Judenjungen sind nun doch junge Juden geworden...“, in: Susanne Helene Betz / Monika Löscher / Pia Schölnberger (Hrsg.), *a.a.O.*, S. 25

15）Gschwandtner, *a.a.O.*, S. 19

16）*Nachrichten des Schwimmclub* (*sic*) *Hakoah* , Nr. 232, Wien, 24. Februar 1932, S. 1

## むすびにかえて

本稿は、ハコア誕生の前史として 19 世紀ウィーンの体操競技団体における反ユダヤ主義の問題と、それに対するユダヤ側の回答としてハコア創設の理念ともなったノルダウの「逞しきユダヤ」思想の由来と背景を中心に検討した。

この点については本稿でもある程度は明らかにできた一方で、ハコアの組織構造や、ハコア団員の社会的構成（つまりハコアの階級的性格）ならびにその具体的な活動実態に関しては、紙幅の関係もあり殆ど踏み込むことができなかった。

また本稿が扱ったハコアとシオニズムの問題に限定しても、このオールラウンド型スポーツ団体に関わった人々（例えばハコアの指導部層、少なからず存

在した報酬を得るプロ選手やコーチ、青少年層を中心とする一般団員とその親たち等）の間にみられるユダヤ民族主義やシオニズムに対する意識の濃淡やズレなどについてもさらに考察を深めていかなければならない。

その他、ハコアと反ユダヤ主義の問題のみならず、ハコアとウィーンに存在した数多のシオニズム団体[1] との関係はどうであったか、またシオニズムにはきわめて冷淡であったウィーンの「同化ユダヤ」社会とハコアの関係はどうであったかなど、ハコアを取り巻く外的環境についても検討すべき課題は多い。これらについての分析は次の機会に譲ることとする。

1）例えばウィーンは 19 世紀からシオニズム運動に傾倒する学生が集結する学生組合の中心地でもあった。ある研究者によれば、1882 年秋に非正統派教徒 Ahawat-Zion のメンバーとユダヤ学生の一部がユダヤ民族主義的な学生組合（Studentenverbindung）を誕生させたとされる。1883 年 3 月に当局は団体結成を認可し、同年 5 月、ウィーンで最初の正式な「学生結社（Kadima）」の全体集会（Plenarversammlung）が開催された。「学生結社」のモットーは「同化への戦い、ユダヤという自己意識の高揚、パレスチナへの移住」であった。テオドール・ヘルツルの『ユダヤ人国家』公刊後、「学生結社」は数千の署名を集め、ヘルツルをシオニズム運動のリーダーに獲得しようとしたとされる。これをモデルにして、ヨーロッパの多くの都市には短期間のうちに、ユダヤ民族主義的な学生組合が誕生した。ユダヤ学生は、これによって反ユダヤ主義的な敵対勢力に対抗しようとした。ちなみに 1909 年、オーストリアにはすでに「2 ダース」を超えるシオニズム団体が成立し、そのほとんどがウィーンにあったとされる。Peter Haber, „Zionismus in Österreich“, in: Heiko Haumann（Hrsg.）, *a.a.O.*, S.110f.　このことからも、シオニズム学生組合のメンバーであると同時にハコアの構成員であるケースは多かったものと推測されるが、今後の検討が必要となる。

〔付記〕　本稿は、2015 年度獨協大学特別研究休暇による成果の一部である。